

福島の1年、そしてこれから

一般社団法人福島県作業療法士会 会長 岡本 宏二

これを書いているのは、あと1カ月であの日（平成23年3月11日）から丸1年になる2月中旬である。まずは、我々は生かされていることに感謝しなければならない。今まで、どのくらいの方々に福島の作業療法士たちは助けられてきたであろう。本当にその方々には感謝の言葉を何度申し上げても足りないくらいである。

ボランティアに来ていただいた、日本作業療法士協会の三役・理事の方々をはじめ、会員の有志の方々、各団体、各個人、本当に有り難かった。また、福島の地場産業のものを遠い空の下で買っていただいた方々、本当に有り難かった。義援金や支援金等々、お金を送っていただいた数多くの方々、お声かけいただいた多くの方々…。本当にお礼の言いようもない。

これまでの経過は福島県作業療法士会のホームページを開いていただければ一目瞭然であるが、最近では、本紙や『作業療法ジャーナル』、また学会や研修会でもいろいろな機会を設けていただき報告させてもらった。

全体的な福島の状況は連日報道されている通りである。

「この一年を振り返って…」ということであるが、今まで何度となく振り返ってきた。

何か欲しいものはないかとの質問に対しては、この1年間を通して一貫して「現金をください。福島の地場ものを買ってください。観光に来てください」と答えてきた。ちょっと品のないお願いであったが、本音であり、今も変わらない。

福島県でのボランティア活動は、できるだけ自主的かつ継続的な支援をとお願いしてきた。我々は非力であると、最初にギブアップを宣言した。ボランティアの先頭に立って行動することもできず、お手伝いすらままならない状態であった。皆様は、我々のわがままなお願いに本当に今までよくお付き合いいただいたと心より感謝している。

また、福島県は、情報の発信が遅く、また遅れたこともあり、どう出してよいのかもわからないくらいに混乱していたことがたくさんあり、ご無礼な点も数々あったと思う。この場をお借りしてお詫びする。

震災後は、いろいろ考えさせられ、価値観の変化も多かれ少なかれあった1年であった。

何を考えさせられたか…。

日本人らしい一場面

震災直後、あの、食品が少ない、ガソリンがない、水がない、交通網はところどころズブズブ…の頃。何時に開くか、今日、店は開くのかさえもわからないガソリンスタンドに、お行儀よく見事にきれいに長く一列に車が並んでいた。それでも誰も怒ることもなく、喧嘩もなく、みんなじっと待っていた。それでも開かないと仕方がないと、また次の日に並びなおしていた。海外でよく目にする、ガソリンスタンド等への襲撃や暴動はなかった。

明日をも知れぬ身なのに、自分の家の味噌がない時に隣のうちの醤油の心配をする民族であることの一端を垣間見た気がした。

お金で買えないものもあるが、お金も必要だということ

「お金で買えないものが、やはりたくさんある」ということと「お金がないと何もできない」ということを改めて実感した。バブルの後に、ある時代の寵児が「お金で買えないものはない」と言ったが、お金で買えないものは、人間の絆をはじめたくさんある。しかし、お金がないと避難をすることや食料を調達することすらできないこともよくわかった。

「絆」について

震災後、「日本中、絆は強まった」とよく聞かれる。確かにそう思うことも多々あるが、その言葉にかなりの温度差があり、またあって当たり前であると思う。

「日本は一つになった、みんなが応援してくれている」というのも本当であるが、その「みんな」という言い方があやしい。その証拠に、福島の廃材の受け入れ先がなかなか進まない、福島の地場のものを買わない人があるなど、いくつかの問題がある。私は、人それぞれ価値観が違うことでもあるし、それが人間らしくて当然だと思う。悪いのは「みんな」という言い方で、「大体は」に直すといいように思う。人間はやはり、絶対矛盾の自己同一といったところなんだと思った。選択するということ。「事情」と「都合」がそれぞれにあるということ。逃げたのか？避難したのか？そんなことは価値観や考え方の違いでどうでもいいことと思うし、何が正しいかわからない。

私も、お金があり、働かなくても何不自由なく、ハワ

イに別荘でもあれば、真っ先に福島を離れていたと思う。多くの人が事情やジレンマの中で移動した。放射線量が上がっても、未だに残っているから立派だと思われる人がいるようであるが、はなはだ心苦しい次第である。

ひとは作業をすることで元気になれる

作業の強さと作業療法士の強み。作業を媒介にして、工夫したり笑ったり…元気を作り出すことの実践が行われた。体を動かすこと、声を出すことにより、気持ちが起こされ元気になり、本人も気づかなかった本当の要求も浮き彫りになってきた。「人は作業をすることで元気になれる」は本当であったと実感した。

情報に基づく長期戦と直感の重要性

情報に基づく長期戦に対する予定も大切ではあるが、今日の具体的な直感の一手が重要であること。情報が多ければ多いほど、次の具体的な一手がなかなか打ちづらくなり、決断が遅れる場合があるようだ。ある程度考えたら、自主的にまずは、「ごちゃごちゃ言わないで、行かれるところまで行こう。行ったところで考えよう」という活動や事業、ボランティアは成功している例が多かったのではないだろうか。情報収集や理屈が過度になりすぎ、根拠が少なくてもどうかと思う。災害時には臨機応変に対応していくということが往々にしてあるようだ。

やはり自分が一番かわいいということ

それを、卑下する人がいる。それにより自分自身を責めている人もいる。災害時に、錦の御旗（正論）は、あまり役に立たないと思った。まず、自分より相手のことを考えることが美德のように言われているが、なかなか難しいのも現実であると思う。また、自分の状態が不安定だと相手のことを考えることがなかなかできない。それよりも震災時にみんなで助け合った些細なこと、声をかけ合うこと、動物の心配をすることとかを大切にしたいと思った。

生活、医療・介護・福祉、産業の関係性

人の生活があり、そこに住んでいるから、医療・介護・福祉があるということ。すなわち、そこにきちんと産業（経済活動）が息づいていないと医療・介護・福祉が展開しないということ。仕事がなく、今までいた地域に住めない。もしくは、事情があり、今までいた地域を離れなければいけない。そのようにして、今までいた地域に人がいなくなり、住民が大幅に減少すると、福祉や医

療や介護は必要ないということになり、企業にとっても需要がない、採算がとれないと評価される。人がいないということは、福祉や医療や介護は必要ない、企業にとっては、需要がない、採算がとれないと思われる。経済地盤が弱まると、公的なお金が減り、福祉や医療や介護は展開しない。福祉や医療や介護は公的なお金がかかるので、どうしてもその地域で産業が成り立っている必要があるのである。

気持ちを分かち合うこと

嘆き悲しむ人と場所があり、きちんと怒りや愚痴をこぼすこと、誰かと一緒にいること、笑うことがやはり大切だということ。ボランティアさんに一番お願いしたいことであり、実際にそばにいてくれ、話を聞いてくれ、一緒に笑うことが一番よかったようである。

これから・・・

永六輔さんの詩に

「生きることは、人に迷惑をかけること

生きていくということは、その借りを返していくこと」というのがある。

未だに、福島県は揺れている。実際に、避難民が、冬の厳しさに雪国では生活が難しく、一時的に浜のほうに移動している。一時的な人口増加（何万人規模）がある地域もある。しかし、それも長くは続かない。もうしばらくは、福島県民の大移動（右往左往）は続くのであろう。今後についてであるが、未来は常に揺れ動くので解らないが、忘れてはいけない大切なことがある。皆様には、今までと同じように、我々をいろいろな面で支えていただきたい。

今までのように、遊びに来てほしい。ボランティアに来てほしい。ときどき傍にいて、私たちの話に耳を傾けてほしい。

皆様のご支援ご協力、ご鞭撻を今後ともよろしく願っています。

最後に、この場をお借りしまして、お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、ご家族が一日も早く自分なりの生活を取り戻せますようにお祈りいたします。

また、放射能問題が一日も早く終息して、安心してその故郷で過ごせますように。

二度とこのような災害に巻き込まれ被災者が出ませんようにと常に願っています。